

顕浄土真実行文類二(一六)

高田短期大学学長 栗原廣海

一、必得往生の釈

聖人は、名号のいわれを明らかにするために、善導大師の『観無量寿経疏』「玄義分」から、言南無者、即是帰命、亦是発願回向之義。言阿弥陀仏者、即是其行。以斯義故必得往生。(南無と言うは、すなわちこれ帰命なり。またこれ発願回向の義なり。阿弥陀仏と言うは、すなわちこれその行なり。この義をもつてのゆえに必ず往生を得。)

の、いわゆる六字釈を引用し、詳しく御自釈されています。その中から、前々回、前回において「南無」がもつ「帰命」と「発願回向」の意味についての解釈、「即是其行」についての解釈を考察してきました。今回は「必得往生」の解釈を考察し

迷いの世界にありながら、それから分かれてさとりを極めるべき正定聚の位に定まることであって、金剛石のような堅い信心を得ているすがたである)

と言われます。

善導大師は、「この義をもつてのゆえに」、すなわち、「南無阿弥陀仏」の名号は、「願」と「行」を具足して、浄土に往生する条件を欠け目なく具えているから、必ず往生することができると思われるのですが、聖人はこの「必得往生」を、「不退の位に至ることを獲ること」をあらわしていると言われているのです。では「不退の位」とはどのような位なのでしょう。

二、不退の位

「不退の位」は、私たちが普段拝読する『浄土高僧和讃』「龍樹菩薩」の第六首に、不退の位すみやかに

えんとおもわんひとはみな

たいと思います。

聖人は、「以斯義故必得往生(この義をもつてのゆえに必ず往生を得)」を釈して、必得往生というは、不退の位に至ることを獲ることを彰わすなり。『経』には「即得」と言えり、釈には「必定」と云えり。即の言は、願力を聞くに由りて報土の真因決定する時剋の極促を光闡するなり。必の言は審なり、然となり、分極なり、金剛心成就の貌なり。

(「必得往生」とは、この世で不退の位に至ることをあらわしている。『無量寿経』には「即得」と説かれ、龍樹の『十住毘婆沙論』には「必定」と言われている。「即」は、本願のいわれを聞くことよって、真実報土に往生できる因が決定する、まさにその時にという時の極まりを明らかに示されたものである。「必」の字は、明らかに定まるということであり、本願力の自然の道理をあらわし、

恭敬の心に執持して 弥陀の名号称すべし

と詠われていることでよく知られています。不退」とは、サンスクリット語の avivartanīya または avavartika の訳語で、「不退転」、または「無退」とも訳され、阿鞞跋致・阿惟越致などと音写されます。『一念多念文意』には、

この位に定まりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆえに、等正覚を成るとも説き、阿毘跋致にいたるとも、阿惟越致にいたるとも説きたまう。

と言われ、『尊号真像銘文』には、不退というは仏にかならず成るべき身と定まる位なり。

と説かれているように、そこに至れば必ずこの上ないさとりを得て仏になることができ、二度と退歩しない位のことです。

その「不退の位」にいつつくことができるのか

については、第十八願の成就文に、
あらゆる衆生、その名号を聞き、信心歡喜
せんこと乃至一念せん。至心に回向したまへ
り。かの国に生れんと願すれば、即ち往生
を得、不退転に住せん。ただ五逆と正法
を誹謗するものとをば除く。(『無量寿経』
下巻)

と説かれているように、往生を得ることによつて
つくことができる和理解するのが従来の理解で
す。すなわち、浄土に往生すれば必ずこの上ない
さとりをさとつて仏になることができる位につ
き、そこから退歩しないというのです。しかし、
親鸞聖人は、『一念多念文意』に、

他力信樂のひとは、この世のうちにて不退
の位にのぼりて、かならず大般涅槃のさと
りをひらかんこと、弥勒のごとしとなり。

と言われるように、「不退の位」につくことがで
きるのは、命終後に往生してからではなく、「こ
の世のうち」、すなわち現世においてであり、往

と言われます。「時剋の極促」とは、時間の極ま
りのことで、本願を聞信する心が起こった、その
平生の一念、瞬間に、真実の浄土に往生する正因
が定まることを「即」と言うのだとのお示しです。

「時剋の極促」は、「信文類」にも、
それ真実の信樂を按ずるに、信樂に一念
あり。一念とはこれ信樂開發の時剋の極
促を顕し、広大難思の慶心を彰すなり。

と言われています。ここでは、信樂開發の一念、
すなわち、信心が開発したときの時間の極まりの
ことが言われ、信心は時間の経過とともに徐々に
確かなものになつていくというものではないこと
が示されています。「時剋の極促」を含むこれら
二つの文を合わせて考えれば、本願を疑いなく聞
き信ずる一念の信心が開発したその瞬間に、真実
の浄土に往生する真因が定まり、往生すれば即成
仏することができる「不退の位」につくこと
ができると言われているわけです。

次に、「必得」「必定」の「必」とは、

生すれば、即成仏することができる、往生即成
仏を説かれたのでした。それ故聖人にとつては、
「必得往生」、すなわち「必ず往生することがで
きる」ということは、「必ず成仏することができ
る」と同じであるから、「必得往生」を、必
ず成仏することが約束されてそこから退くことの
ない「不退の位」を得ることであると解釈された
のでした。

三、「即」と「必」の釈

そして善導大師が言われる「必得」は、『無量
寿経』第十八願成就文に「即ち往生を得」と言わ
れる「即得」と同じことであり、龍樹菩薩が『十
住毘婆沙論』の「易行品」に、「即時入必定」と
言われた、「必定」とも同じ意味であるとされる
のです。

さらに、「即得往生」の「即」を解釈して、
即の言は、願力を聞くに由りて報土の真因決
定する時剋の極促を光闡するなり。

必の言は、審なり、然となり、分極なり、
金剛心成就の貌なり。

と言われます。「審なり」とは、ものごとがはつ
きりして明らかであること、すなわち、「不退の
位」について往生成仏がはつきりと約束されてい
ることです。「然となり」とは、不退の位につき、
往生成仏することが定まることが行者のはからい
によつてではなく、本願力に導かれて実現するこ
とであるということ、「分極なり」とは、往生が
はつきりと決定していることをあらわしていま
す。

そして、「不退の位」につき、往生成仏すべき
身に定まるのは、何ものにも壊されることのない
堅い信心が成就したすがたであることをあらわす
ために、「金剛心成就の貌なり」と言われたので
した。